

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1098 号	氏 名	田 中 厚 誌
論文審査担当者	主 査 小 泉 知 展 副 査 能 勢 博 ・ 杠 俊 介		

(論文審査の結果の要旨)

軟部肉腫では一般的に手術が治療の中心であり、周囲の筋を含めた広範切除を行う必要がある。このため大腿前方コンパートメントに発生した軟部肉腫では、生活動作に密接に関連する大腿四頭筋を部分切除もしくは完全切除することとなり、切除後に膝伸展筋力低下を引き起こし、術後機能も低下する。しかし切除範囲により膝伸展筋力低下の程度は様々であり、残存筋力の観点から術後機能を予測した報告はほとんどない。今回、田中は大腿前方コンパートメント発生軟部肉腫に対して大腿四頭筋を切除した症例の膝伸展筋力を測定し、術後機能と膝伸展筋力の関連性を評価することで、術前に術後機能を予測する際の指標、および良好な術後機能が見込まれる切除範囲の目安について検討した。

対象は大腿四頭筋を部分切除もしくは全切除した 18 例で、膝伸展筋力は等速性筋力測定装置を用いて測定した。術後機能評価は疾患特異的な患肢機能尺度として Musculoskeletal Tumor Society (MSTS) score、疾患特異的 ADL 尺度として Toronto Extremity Salvage Score (TESS)、包括的 QOL 尺度として European Quality of Life-5 Dimensions (EQ-5D)、Short Form 8 (SF-8) を使用した。

その結果、田中は次の結論を得た。

1. 大腿四頭筋の切除筋数が多いほど膝伸展筋力は有意に低値であった。
2. 膝伸展筋力は大腿四頭筋切除後の身体機能と QOL（特に身体尺度）に関連していた。
3. 機能評価表において良好な術後成績が得られる膝伸展筋力のカットオフ値は 56.2%であった。
4. 各切除群の膝伸展筋力の中央値とカットオフ値を比較すると、2.5 筋切除まではカットオフ値と同等の膝伸展筋力であったが、3 筋切除以上ではカットオフ値以下であった。

今回の結果から、術前に残存筋力と術後機能を予測するには切除筋数が有用な指標になり、少なくとも 2 筋の連続性が保たれていれば日常生活動作において良好な機能が見込まれると考えられた。

よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。